

第 34 回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム社会科学賞～

< 順不同 >

※当論文賞受賞時の所属を記載しております。

佐々木 裕一 氏（東京経済大学 コミュニケーション学部 教授）

テレコム社会科学賞 入賞

「ソーシャルメディア四半世紀 情報資本主義に飲み込まれる時間とコンテンツ」



この度は、名誉ある「第 34 回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞」の受賞を、まことに光栄に存じます。『ソーシャルメディア四半世紀』は、私の 20 年以上の多面的研究の成果ですので、嬉しさもひとしおです。取材に応じて頂いたユーザー参加型サービスの経営者の方々、本書を世に出すにあたりご協力いただいた方々にもこの場を借りまして御礼申し上げます。

情報技術によって作られる物理的環境が私たちのコミュニケーションのあり方や内容に少なからぬ影響をもたらすという仮説がこの研究の出発点でした。この物理的環境は「アーキテクチャ」と呼ばれますが、これを相手にする際、各サービスの持つ収益モデルも詳細に分析していく必要があるという着眼がこの本の特色になります。時代とともに変化していったアーキテクチャ／利用者／収益モデルの関係を、インタビューデータをふんだんに引用し、マクロデータも参照しながら描き出しました。

歴史を詳述した理論的帰結は、「人間同士の、そして人間とコンピュータ(機械)のコミュニケーションを今より低速化させ、ひとりひとりが内省の機会と深さを得られるような情報ネットワーク社会を設計すべき」というものでした。もちろんこれが真理であるとは言えません。しかし拙著で鳴らした現在の情報環境とその上で展開されるコミュニケーションへの警鐘を多くの方が真剣に受けとめ、私の悲観的予測が外れ、良い方向へと変わることが実は筆者としての最大の喜びになると思います。

今回の受賞を励みとして、この先も望ましい情報ネットワーク社会の実現に何らかの寄与ができるように研究を重ね、若い人に語っていく所存です。また最後になりましたが、電気通信普及財団のますますのご発展を祈念いたします。

片野 浩一 氏 (明星大学 経営学部 教授)

テレコム社会科学賞 入賞

「コミュニティ・ジェネレーション—『初音ミク』とユーザー生成コンテンツがつなぐネットワーク—」



この度は、栄えある「第 34 回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞」を賜り、ありがとうございました。共著者の石田実(東洋大学経営学部講師)とともに、財団関係者の皆様へ改めてお礼申し上げます。

本書は、マーケティングを専門とする私たちが、ユーザー・コミュニティのなかで創発される音楽・動画コンテンツ(ユーザー生成コンテンツ:user-generated content)を対象に、N次創作と呼ばれる二次・三次創作の投稿連鎖とそのネットワークを観察するとともに、クリエイティブ・ユーザーの創作動機や行動を調査研究したものです。専門企業やプロの作り手が創るコンテンツをユーザーが消費する、という従来の構図から、デジタル社会では作り手とユーザーの距離が一気に縮まり、ユーザーが自らコンテンツを創作するユーザー主導型の市場が拡大しています。このストリームをけん引したのが「初音ミク」現象であり、投稿コミュニティの環境を提供したニコニコ動画や YouTube のようなオープン・メディアの存在でした。詳しくは本書の内容に譲りますが、「初音ミク」は複数の価値から成る複合体であり、それはコミュニティに参加する多数のユーザーが付与した集成的な共創価値でした。その実証研究から、ユーザー生成コンテンツがメディアの民主化を推し進める胎動をミクロとマクロの観点から確認できました。

インターネットを初めとする情報通信技術の発展は、消費者やユーザーに大きな力を与え、コンテンツの創作機会を飛躍的に広げると同時に、従来型のメディアに変容を迫っています。その動向には光と影の両面がありますが、ユーザーが手に入れた力はクリエイティブ産業全体の発展に大いに貢献できていると感じています。今回の受賞で本書に一定の評価をいただいたことを励みに、コンテンツとメディアの変容と革新について研究を続けてまいります。

立本 博文 氏 (筑波大学 ビジネスサイエンス系 教授)

テレコム社会科学賞 奨励賞

「プラットフォーム企業のグローバル戦略—オープン標準の戦略的活用とビジネス・エコシステム」



この度は、名誉ある「第 34 回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞 奨励賞」を頂き、心より御礼申し上げます。本書は、プラットフォーム企業がグローバル化の中で「どのようにエコシステムを拡大させながら、同時に、自社の収益獲得を実現しているのか」を解明したものです。

グローバル化を利用するプラットフォーム企業のビジネスモデルは 1990 年代に遡ります。本書ではデジタル携帯電話、半導体製造装置、パソコン、そして車載エレクトロニクスの各分野の事例を取り上げ、それらの共通項を抽出し、プラットフォーム企業のグローバル戦略を明らかにしました。

プラットフォーム企業は、オープン標準に積極的に関与することで自社に有利なネットワーク効果を発生させ、一方で、キャッチアップしたい新興国産業をエコシステムに誘引することで巨大なグローバル市場を形成します。これにより、エコシステム拡大と収益獲得を同時に実現します。ただし、この戦略メカニズムは副産物も生み出します。つまり、プラットフォーム企業が台頭すると、ある領域では国際的な産業構造の転換(先進国企業の凋落と新興国企業の台頭)が発生しやすくなります。

この分野の動きはとても早く、本書で扱ったようなオープン標準を使ってネットワーク効果を発生させる以上の戦略ツールを、すでにプラットフォーム企業は開発しています。大量データと AI を用いる方法です。このような方法はネットサービス分野で特に顕著で、テック・ジャイアントと呼ばれる企業がデータを囲い込んでいることが問題となっています。この点は更に本分野の研究が必要な分野です。一方で、医療、産業、交通等の分野では、安全・安心や相互接続性が重要なため、本書で扱ったオープン標準を用いるやり方が依然として有効です。本書の研究が、産業界や今後の学術研究に少しでも貢献できれば大変幸せです

最後になりましたが、電気通信普及財団の益々のご発展とご繁栄を心より祈念申し上げます。